

起信の巻

起信の巻

目次

かへり路	一	彌陀法身	三〇
法の彌陀人の彌陀	二	光壽	三二
宇宙本体	五	真如緣起	三三
阿彌陀と致一	七	万有緣起	三七
啓示	九	涅槃及佛身	三八
無限精神態	一一	心生滅	四〇
無辺光	一二	覺の階級	四一
彌陀の定相	一四	宗教主体	四二
神の不識的産出	二一	不思議業相	四三
絶対觀念	二四	性淨本覺の体相	四四
生滅門	二六	不覺	四六
無量光	二八	無明薰習	五一
物三眼	二九	真如具備の聖德	五四
		無辺光の定相	五五

かへり路

學語眞如、即ち彌陀法身は、我等是によりて生じ、是に依り保存せらるゝも、自らこの自我妄執のなみ一たび起りぬれば、眞如の海の本のまゝをわすれ、自ら我なりと執してさること能はざりしに、我らかりそめにも人てふ身を受けてよりこの性稟よりおもひみれば、虚空靈妙なる眞如を親として人てふ子のあるは、いふかし、空體いかにして、かたちある子を産出すべき理があらんと、まよひ子をあはれみ、歸り路をしめさんがために、法身は子をよぶ方便より、子に應ずる父のすがたとなりて、かぎりなきかたち、かぎりなきひかりと、いのちなる、めぐみのすがたとなりて、われらを招喚したまふ、一たびわれら父の御名をき、父の御ところをおもへば、かぎりなきしたひとよろこびとがおこりて、いかなるうきことが、このかりの身にあらうともまことの父のもとに歸り路のたびのなか、なにかはつらきことあらん。

眞如(チ)は衆生(コドモ)の疑ひをのぞきて歸本覺(ミナモトニヨセル)のために無量光壽(大ナルヒト)となりてわれらを招喚したまふ。

法の彌陀、人の彌陀

法の彌陀とは法爾として無限の光壽、實體として法身。法身とは創建の神即ち正因佛性の統一の客體。
報身としては終局目的に統一する無限の光壽。衆生の信仰を開展し無上の智慧と靈徳とに同化する。信仰の結果を興へる神。
法の彌陀とは、終局目的に無限の光壽と統一的に攝化する處の非人格の神に名づく一切諸佛此法によらずして、正覺を成すといふ理り有ることなし。

人の彌陀

人の彌陀とは法身果位の終局目的即ち統一の無限の光壽を顯はし、衆生を攝化せんが爲に、常に處々に於て法藏の因を示し、双方の果を稱へ、人を以て彌陀の法を顯はす。例せば行の普賢、人普賢と云ふが如し。導師釋に、阿彌陀とは是法、覺者は人法並彰故、名阿彌陀佛とは此義なり。法の彌陀なくして人の彌陀あることなし、本體なくして現象界を現すが如し。

法の彌陀とは即ち萬類を現象し、萬物を化する本體を、最高等なる宗数より名づけたるものなり。此絶對なる宇宙の本體を認むるもの、自己の意識のいかによつて其客體を異容に見ゆる。たとへば赤き眼鏡を以ては萬物を赤しと視るが如し。自己の意識の異によりて世界觀も亦異容なり。

法の阿彌陀

阿彌陀とは無限の義また絶對の義。この絶對無限を外にして、一物も有るべき理あることなし。此無限を開展して三方面にして彌陀の實在を説明せんと欲す。

- 一、本體
- 二、差別世界
- 三、()

本體は一なれども未だ覺せざるときは、唯絕對不可知なれども、一たび覺すれば、是終局の()光明となつては、無限の光となりて現じ來る。實に無限の精神態なりと覺る。

未だ覺せざるときは阿彌陀とは高遠なる不可解()せしも無限の光によりて始めて識る絕對無限の光の中の自中在なる事と身もまたこの地(球)及び現象界悉く無限の中の一部たることを知る。

無量光

法身の體絕對にして空間に遍し、時間に遍したる實體にして、之を表す爲め無量光と云ふ。時間態と表せば亦無限壽なり。光とは終局目的を世界に示すが爲に光と云ふ

宇宙本體

此宇宙の本體は絕對無限の光明にして無限の壽命なりと信解——仰信——解信——證明すべし。

初めに三段に區別する

- 三種の性質、本體。世界は脱却、終局は歸()

彌陀は絕對無限の理性とせば、其屬性は即ち相としては觀念的に、彌陀の觀念には神靈態にして威神無極。

何を以てか識ることを得。宗教的關係の觀念に於て客體を觀じぬれば、神聖體にして無限の威神ありて、之に()念せり。主()を()て自ら畏神()仰せしむる故に。又神は真正正義なりと、神は神聖の即ち大智慧の光明によりて照さるゝ觀念に不正

五

四

をすて、正義ならしむる故に知る神は是正義。神には無邊の體性にして、

神靈態 正義、恩寵と現はる。

至真、至善、至美と顯はる。

自中在永恆不變

絕對無限の本體、大精神態。(真如の理)

消極には非空間非時間非物質一切の動力の本體。

積極には自中在永劫不變の精神態

眞心常恆不變淨法滿足

宇宙の本體大精神

個體の小精神のごとし

虛徹靈明

六

阿彌陀と致一を趣とす

實體。終局目的。即ち客體は無限の光と壽なり。

實體的 絕對本體

個人的目的を天然生活の重要な要素となせり。

終局目的

理想ある人は無限の光と壽とを欲望せざるものなし、精神過程の中に。

個人各個の目的は表面は孤立の如くなれ其内實は統一のなり。終局目的世界秩序の一部分なり。個人は絕對の方便

彌陀は十方一切を攝護靈化せんとの大願、絕對的終局目的の神なり。

世界依屬を脱却の可能と()致一的秩序の始原、又擔保たる一神ありとし、一切の

特殊目的を自己の中に止揚すべき終局目的に解脱の()

七

目的

八

眞如は目的をもてすべてを無作の作として現出・産出せしものとすれば、被造者の眞實なる果實は精神に結ぶべきものとし、能造主はまた此被造者に之を精神に價値ある果を結ばせざるべからず。之を能く養ひ之を攝護し解脱靈化の光を與へざるべからず。眞神は此恩寵を以て我らに無限の光といのちに歸るめぐみをあたへたまふ。即ちアマタの用なり。

光

彌陀の神聖正義恩寵の光は我らの心機に致一して菩提心願作佛心と現はる。
倫理的説明は恩寵の客觀性を明にし主觀的と客觀と道德秩序の關係より絶對の中に導きたり。

終局目的世界秩序は即世界に含著せる神、道德的秩序は人類に(一)せる神なり。

啓示

世界には人類啓示とし釋迦を現じ(一)

啓示は神の實現、是が習(種)性をなし、神は神聖公正なりとし、啓示せられて之が薫習せば、自己の精神これに、
神は神靈態度を以て我意に實現したまふこと忘るべからず。たとへば藍にそむる絲の如く、この薫發によつて容體より薫せられ、自己開發して自己の精神神聖態となるべし。

神聖としては神の意志を啓示され、神の意志は自己良心の聲となりて我を主觀的正

九

義となり夫より客觀的正義となり、

一〇

主觀的道德秩序の命令的性質あるが故に、神は人に神靈態と見え、良心の裁判の聲には正義と現はれ、
恩寵には破れ染垢せし關係を宗教的關係を回復し、(一)

無限と精神態

絶對的無限光りは是精神態なり。空と有。物質に對する空間はたとへ廣大なるも無數の星界等のすべての物質の爲に障塞せられて無限なる理なし。物質は本より無限にあらざるは論なし。空と物的とを包括して其實に無限に靈通せる精神態なり。不誠的
精神は遍く空間に物質を包て之に交徹通明して絶對なるものは精神のみ。不誠的大精神は實に絶對にして又無限なり。偶に云く、若人真空の理を識らんと欲せば、内心の眞如還て外に徧し、情と非情と共に一體、處に徧して眞法界と同じ、と。自ら冥想觀念に意を注めて觀せよ。十方無限の空間は無數の世界を含んで觀念的世界は之を大地をもすすべての物質をも交徹靈通して障なければなり。

觀念界

一一

無邊光とは彌陀の智。不識の精神態徧空間。此無邊光を認識せんと欲せば、この宇宙現象世界は無邊の精神を中心として現象せる世界なることを。

無邊光

此不識精神態心は自爾として虚徹靈明にして交通すべき理を有せり。自己の認識と觀念とが證明する處也。目を擧げて視よ。大空の無邊の星宿は森然として眼界に渉入し山河大地は悉く是眼界の認識する處ならざるなし。意を撮めて閉目冥想すれば、無邊の星宿も大地も悉くすべての感覺世界は虚徹靈通して觀念理想の十方無邊の法界として自己の觀念理想の中なるを知らん。

此に眞々如々虚徹靈明の精神態光明ありて不可思議の妙用ありて然るなり。之を無邊光と名づく。無邊の邊體に交徹靈通する眞理なり。

彌陀はこの絶待不識の精神の大圓鏡にして一切世界は鏡中の影像なり。

永恒自中存非物質の大圓覺の中にありて、吾人同じく同一理性の一分員なるを以て、すべての心を攝して觀念する時は、十方界洞然として觀念理想のみとなり、此世界は大圓覺の爲に統一せらるゝ世界なることを知り、觀念に客觀界を觀念するは不識的なり。絶待の鏡の本體は即ち大圓覺の精神にして、影現せる世界は神の本質より業識自己の業識が見て居る影像なり。

阿難は昔しは曾て意識せざりし時は心は是れ胸中にありと。然るに大覺妙心顯はれてのち、即ち自ら識る、十方微塵の世界も山河紅海大地に至るまで悉く是大覺妙心中に在ること大海の一漚を見るが如しと識る。

この虚徹靈通の理に於ては、物質界にも具形式を示せり。見よ一の珠を臺の上に置くととき彼の玉には無意識にして太陽の光もすべての周圍の物體をも玉に映現せり。彼の物は此に映じ此は彼に寫す。萬物は同じく交徹して無邊光の眞理の範圍の中なる物

質たればなり。否萬物悉く無邊光の現象なればなり。しかれども誤るなかれ世界機制と無邊光本質との區別を。

絶對の無邊光は不可思議にして世界萬物となりて實現、世界はは一員にして之を統一の總體は即ち如來無邊光之なり。

彌陀の定相

一切知。佛知は意識を離れて眞知なり。眞知は無知なり。無智の智は事として知らざるなし。

彌陀の大智慧光明とは虚徹靈明なる眞理の光にして、已に不識的にして、常に統一的にして、而も一切の多數を同時に開展すべきたとへば萬物を照すが如くに、此光は法界衆生の精神界を照して、佛知見を開かため、虚徹靈明にして、横に十方に周徧して交徹し、豎に三際に徹通して一時一念に精神界の光となりて一切を開展す。

一切知とは、絶對的理性のみにして、世界的萬物を抽捨したる主觀的智慧の光のみにして、客觀界の感覺的の萬物を抽捨したる精神のみ。不識精神が觀念に冥想して徹照するとき、徧空問徧時間唯一の理想のみとなりて徹照す。

道種智。一切の萬物は絶對理性を中心として、十界三千乃至無量の種類となり、其性質相貌主體能力作用を各特別にして、無量の事法界となる。其を實の如くに照見して誤ることなきを道種智と云ふ。

一切種智。一切萬物は表面より見るときは、個々其國土も身體も心質も各個々別々の如くなれども、この光に依りて深く各自の根底を徹照するときは、この表面の形質を改めず、即ち絶對理性に綜合統一せられたり。個々自ら意識せざるのみ。一切の萬有の根底は彌陀無邊の光即ち絶對理性なるを知る。若し此無邊光に觀念するときは一切悉く然るを認識すべし。

彌陀の智慧は意識的に非ず。即ち不識的、所謂眞知は無智なり。無智は自然に知ら

ざるなし。

彌陀の光は不識的産出活動

彌陀の智慧は不識的産出活動にして、一切の精神にあつて開展す、

彌陀の一切知とは不識的産出活動にして、其無邊の觀念を實現すべき圓滿豐備なる精神態にして、法界に周滿して、衆生の精神界を照し、常に衆生の精神を開展し、佛性を顯現せしむ。又無邊の聖徳を顯彰せしむる光明なり。

彌陀は人の精神の粹のみにして、自ら圓滿豐備せるを以て、受動的の材料を要せず有限個人の如くに意識あるなし。衆生の精神を開發し衆生に與ふ産出的一切知を有す彌陀は絶対觀念の内容中に産出者擔保とし、)

大圓鏡

此絕對無邊の不識的精神態、彌陀の大圓鏡は、絕對十方法界は徧空間是絕對精神態の大圓鏡とせば一切の世界はこのまゝ、是鏡中に影現せる影像にして、是不識的大精神に顯はれたる影像なり。世界も衆生も精神もこのまゝ、絕對精神界に映現したるのである。此中に映像したる萬類は、各唯自己の境界のみを見る。十界各異なる影像と現するも鏡の本體精神よりは異方面を同時に寫象すべし。絕對より見ればこのまゝ寫象なればなり。

平等性智

世界の萬類は國土も身體も精神に於ても表面より見れば各々特殊の如くなるも、其皮面の皮相なる物質と生理的の心質とを抽捨して、其中心のみを顯せば、絕對なる理性のみにして、平等一味の海水にして、十界三千の依正の如くに異類なるものに非ず無邊の光によりて、自己の根底顯現時きは、絕對理性が法界に周徧し交徹靈明にして不可思議なり。

妙觀察智

彌陀の觀念は統一にして、一切の多數を同時に開展すべき行動なり。彌陀は無知の

知(一)一切の知は産出的に一切を照曜すれど、衆生は各其機類に隨て此光に開示せら

る。是法界即ち衆生の直接精神界に流行せる光明にして、客觀界の法を聞て、自ら證るといふも、是絕對精神より開展せられたるに外ならず。無邊の光明に照曜されたるなり。人々啓示に接す機能は自己の機能にして、即ち彌陀の機能なれば、自己は客體を知見すといふも、客體に知見を與へられしといふも、彼本覺の客體に對すれば、知見を與へられしといふが是なり。絕對の眞理の光は本來同一なれども、衆生の機能によりて此光を異容に見る。二乗は消極のみに徧眞を見る、菩薩は分に積極の理を悟り佛のみ圓滿なり。此光によれば無邊の聖知を與へられて無量の法門を悟るべし。

成所作智

一切能態にして、即ち絕對精神の全内容が、不斷に實現する意志にして、即ち一切能力と名づくべし。

至眞

一切の境界の根底唯如々法身のみ。衆生自己妄に起すが故に一切の境界あり。若し吾我妄念を離るれば唯一の眞心にして徧せざる所ろなし。此を如來廣大性智究竟の義と謂ふ。

如來見相を離れて徧せざる所なし。

心眞實の故に即諸法の性なり。自體一切の妄法を顯照す。大智用あつて)

如來は是此宇宙の本體なり。

一切の戲論を離れ、有に非ず。無に非ず。自ら妄想分別を離れて仰て歸命すべし。

如來は是究竟如々第一義。

自己實際の根底に入て相應すべし。

如來は無限の光なり。

唯眞理のみ是絕對の光なり。唯絕對の眞理のみ。無限の生命なり。眞理の光の外に眞理あるなし。眞理の壽の外に眞理あるなしと觀すべし。自己の妄想のあらん限りは眞理現はるゝことなし。眞理光顯現時きは、妄想忽に消盡すべければなり。

至善

如來の法身平等にして、一切處に徧して、作意あることなし、故に自然と説く。但衆生の心に依りて現す、衆生心は猶し鏡の如し。

如來は是萬德圓滿の體にして、一切の處に周遍せり。萬善萬德豐備して光明態にして十方精神界に照曜せる義なり。聖名を聞き其體を觀するもの、至善に靈化せざるなし。此光に遇もの邪惡とて脱せざるなし。正善として生ぜざるなし。

彌陀は慳貪なく惠施の質、無染にして清淨、無瞋にして（彌陀の光は正慈悲と正義と忍耐と勇敢と一心と智慧とより成れる處なり。救命と惠施と清淨と。

彌陀は是萬善の妙體なり。一切の功德として

無邊光

神の觀念は、常に統一にして、而も一切の多數を同時に開展する行動なれば、心一切の處に通するが故に、一切知態なるを以て、無知の知は自然にして、十方法界の萬物は一時一念にして、佛無邊光裏に炳現す。

佛光無邊の故に豎に三際を盡し、過去の際より未來際に至るまで常に現在にして當念のみ。

彌陀は絕對精神態にして無邊の屬性を以て無邊の空間に周遍し、

神の不識的産出

神の不識的産出活動には其絕對的觀念を直接に實現すべき偉大自在豐富なる者有す。

世界の現存と世界に於ける意識は絕對的世界精神に取りては材料にして此中に其精神の産出力を開展す。

人の精神を精神ならしむる者は意識の内容を形成する活動にして神の精神亦此活動

に成り而も其産出に當りて意識の内容を要せず。

神は人的精神の粹を有し其意識に代りて造作力と産出的一切知を有す。

無我、自覺なし。

神には一定の内容を有すべき意識なし。神は絕對にして一切を包括せる本質なれば非我なし。故に此に對比する我あるなし。絕對觀念の時この内容により外面的に只現在の世界状態あるのみ。内面には一切の過去未來を含有せり。

神は絕對觀念の内容中に自己自を此内容の産出者擔保として直觀せりといふべく又其不識的の一切知態は内面的には其外面的なる世界顯現を包括すること恰も四あれば必ず其中心あるに似たり。人の省慮の如き自覺なし。

感情

神の意欲の方向は無限にして此産生の無限を一時に完成し得べきに非ざれば未満足とし、無限の不快感超世界の不靈福あるが如くに人よりは見ゆれども、神は不識的にして個人の如くの焦慮なく、超自然の意欲ありて常に無限に衆生を度すも、機制的生理の對比的なる愛憎等の感情なし。故に慈悲といふも無縁の慈悲にして感情の愛慈にあら（）

非人格不識的絕對的精神

神は色心二面の根底なりとし、之を産出する神は物質に非ず。意識にも非ず。若し神意識を有せんか不識的なる物質を産出する爲め、其意識を中止せざるべからず。神は自然界を出す爲にも亦意識ある精神を出す爲にも不識的精神ならざるべからず。

本覺始覺

神の本體は絕對にして、一切世界及び人類の根底として本自爾の理性なるも、人類は世界天則の機制と生理規定の素質によりて、不識的に神の機能と致一たるを知らず

此機能は不識にても意識にても、神の又人的にして、人の機能も其意識に現はるゝ迄は不識的に、神の機能も實の宗教的關係に入れば意識的なり。神は其本質にては、人と同じく不識的なりしも、人の意識に於て意識となり、人の神を意識するを助く。有限の個人的意識を離れば神は全く不識的なり。

吾人は神の中に生活し神は吾人の中に存すべし。神は吾に對比する汝として存せば神との致一は到底望なし。非人格の神は(因)なり。

絶待觀念

觀念は唯一にして一切を包括す。其中に複雑なる者を有し、此統一全體の局部意志に實現せられて、有機的世界の個體なり。顯動世界狀態は絶對意志によりて實現せられたる顯動的觀念なり。神の觀念は常に統一にして而も多數を同時に開展する行動、神にして寫象せんと欲せば、過去も現未來も即現在にて、絶對的なるが故に、絶對觀念は同時なるのみならず、意識的直觀の感覺的形式を脱して、直觀的なり。現實は觀念に相應し、觀念又現實に相當し、二者相背くことなし。神的寫象は理性的なり。神の寫象は全く眞實直觀的同時態なるは、一切知と其内容の變轉は全く理性的なるは、切慈態に相當す。

神の定相

神は絶對無邊の本體にして不可思議の態なり。無邊の聖徳眞理を以て屬性とす。之を無邊光と號す。是絶對精神の屬性なりと觀すべし。其屬性とは或は四智十力三身等を以て屬性とし或は………今は、

- 一切智慧 一切能力 神聖 正義 恩寵
- 至眞 至善 至美

彌陀は絶對的精神態にして無邊の光にまた無邊の聖徳の義を包括す。

實體

神の性能

本體より開展して、萬物の根底なる法身如來藏は無限にして絶對なり。産出せられたる現界の世界相待的にして天然規定に束縛せらるゝものに非ず。

之を法身、一心を開きて二種とし、一、心眞如門、二、生滅門、眞如即法身、即一法界大總法門體。

彌陀の本體は根本統一無限體

生滅門

世界は相待的にして有限、有生滅にして、自ら依歸にたらず。宇宙は相待的にして其根底は本體なる絶對的根底より生ず。心生滅とは如來藏に依る故に生滅の心あり。本根なる本體と同一の異面に現はれたるものなり。これに二種あり。

本體より出で、天然規律のまゝなるは起信に一切衆生を覺と名づけば、本より已來念々相續して未だ迷の念を離れざるが故に無始の無明となつて

本覺とは本體より出で、眞理に稱ふ終局目的なる如實に眞如の法一なりと知らざるが故に迷て不覺となる。されば本體を離れたるに非ず。唯自ら眞理なる終局目的を知らざるのみ。猶迷人の方に依るが故に迷ふ。若し方を離れて迷あることなし。この不覺に(

覺とは本覺の體を覺る。この理性には終局の本覺あることを覺りて、信論の覺の義とは、心體念を離るれば虚空界とを等しく偏せざるなし。法界一相是如來の平等法身と。心源を覺するものを如來と云ふ。

無量光

二八

終局目的

本體は法身即ち精神態より現したる世界なれば、終局目的として之を天然より開展したる上(一)に開展し靈化し統一せる神ならざる可からず。

統一の終局目的の彼岸に度らん爲には、個人の目的は絶対目的の一部分にして、絶対目的を以て自己の終局の目的と定めざる可からず。

絶対目的とは彌陀は無限の力を以て一切を攝取して解脱靈化するを彼の願とす。即ち佛意なり。

彌陀の光壽

終局統一無限の光壽

終局目的の世界秩序の擔保の故に攝取不捨

物 三 眼

一、世間の迷へるものはこの世界の現象のみを見て、まゝ、即ち感覺世界宇宙の現象のみを見る。

二、は宇宙の本體は純粹理性なりと見、萬物はより生れ、自己の本體も之に外ならずと見る。

三、此世界の本體は萬物を形造るのみならず、智慧とめぐみの光を以て終局目的に之を攝化する神なりと見る。



二九

宗教語彌陀法身

三〇

學語に云はゞ、起信論に、

心真如即是一法界大總相法門體にして、所謂心性てふものは不生不滅なり、(時間的に)絶対普遍(空間的に)本來離言說相心縁の相を離れ、畢竟平等にして變易あることなし。破壊すべからず。唯是一心、故に真如と名づく。絶対の故に真如の體は遣る可きもの有ることなし。一切法の法悉く皆真なるを以ての故に、亦立べきものなし。一切の法皆同じく如なるを以て、當に知るべし、一切の法説くべからず、念すべからず、故に真如と名づく。

又自體有り、無漏の性功德を具足す。心如は真空にして妙有。空なりと雖斷滅の空に非ず、よく萬物の依となる。有といへども()

實體はこの差別世界の絶対根底にして、現界の因果の上に立つ原因なり。故に實體の本質は天然世界の規なし。時間空間の因果より出づる世界を超越せり。時間空間物質を越て、其消極には非空間非物質にして、實體の活動は一切動力の中に存して、之を含(包)す。遍空間時間活動なり。積極に云はゞ自中存在永恒の精神態なり。信論に、空とは、本より一切の染法に相應せざるが故に、一切法差別の相を離れ、虛妄心念なきを以ての故に、當知真如の自性有相に非ず、無相に非ず、一に非ず、異に非ず、一切衆生妄心あるの故に。念々分別するが故に。

相應せざる故に空と爲す。されども妄心を離れば實に空すべきなし。不空とは已に法體空にして妄なきを以ての故に、即是真心、常恒不變、淨法滿足す。則ち不空と名づく。

自中存在とは、實體は空間の中に非ず、外に非ず、自己に一切活動せるなり。即ち空間時間態の本源にして、實體には非時間非空間にして、時間と空間とは差別界に顯はる。實體より被造者の差別の中に現はらる。

三一

精神態とは

法體空無妄故真心常恒不變

一切は實體の自中存在、實體は（

彌陀法身即光壽

起信に問ふ。如是ならば諸の衆生等、如何が隨順して、而能得入せん。答て、若一切の法説と雖ども、能説の説可きもの有となし。念すと雖ども、亦能念の念すべきもの有となし。是を隨順と名づく。若し念を離る、を名て得入と爲す。

依言眞如二種あり。一如實空。能究竟して實を顯を以ての故に。所謂空とは、本より已來、一切の染法相應せざるが故に、謂く一切の法差別の相を離る。虛妄の信念なきを以ての故に。當に知るべし。眞如の自性有相に非ず。無相に非ず。一に非ず。異に非ず。是衆生妄想分別を超越したる境界なれば、是若し思慮分別せば、却て其實に乖くならんと。しかれども妄心を離れてのは眞實とし、空すべきなきが故に、實體が顯はるゝのである。

不空とは已に法體空にして、妄なきを以ての故に、即是「眞心は常恒不變、淨法滿足。則ち不空と名づく。亦相の取るべき有こと無し。離念の境界唯證と相應するを以ての故に。」

釋云く、真心常恒は無量壽、淨法滿足は無量光、是宗教客體にして、相の取るべきなきは、主體が自己の分別を消極的にする時は、積極には、客體の不空、即ち精神態にして、機能致一的に證すべきのみ。

眞如緣起——實體論——總論

眞如緣起又如來藏緣起と云。如來藏心即ち自性清淨心、此心が起動して宇宙萬有を開展す。絶對心。相待的の心物の原理は非物非心の理體なり。之を一法界大總相法門

三三

體と云ひ、又總該萬有心とも名づく。宇宙の本體を吾人の心性として説明するものなり。

心眞如門、心生滅門とは、一心即ち宇宙を體と相用との二方面よりの釋なり。眞如門即ち體には、宇宙の實體は、空不空とて、凡夫の思慮外に超絶し、自ら過恒沙無漏の性功德を具し、真空妙有。眞如門は宇宙平等一相體性を説明、生滅門即ち相用には生住異滅四相、三細六麁の九相、迷悟の因縁、染淨法界の開展生起を説けり。眞如門は宇宙を統一し宇宙の實體染淨迷悟の上に超ゆ。生滅門は一切個々染淨迷悟凡聖宛然として各其相を現し、宇宙は差別萬相なり。淨縁には（四）聖淨善と現れ染縁には六凡惡染となり。宇宙の顯隱因縁にあり。宇宙を二相とし、世間を假とし出世間を眞とし生滅因縁は外縁の無明が心を動して内外二境を現はし、心の實體此に隱るを染法界差別の開展とす。無明薰習と云ふ。眞如が自發的勢力を起して無明に打勝ち、一心の動搖を静止して、實體に復するを、淨法界の生起とす。之を眞如薰習とす。

實 體

全體心、即宇宙の體の方面。心は不生不滅變動なく、迷て衆生と成り覺て佛と成るも、性本來生滅に非ず、平等一相。千變萬化は衆生妄念によつて見るのみ。若し妄念を絶滅して見よ、一切差別の相は絶えて其迹を現せず。差別の相は吾人心（靈）の起動によつて生ずる影なり。この性は相待の上から決して判（）も説明も作し得べきものに非ず。強て之を思慮説明せば還て妄想に墮す。是故、一切法、本來以來、離言說相離名字相、之を消極には如實空、眞如の體、念慮に絶たり。之を積極に云はば如實不空。

自體無漏性功德を具し、法體空無妄故、即是眞心、常恒不變淨法滿足、則名不空、亦無有相可取、以離念境界、唯證相應故。

三五

萬有緣起

三六

生滅門は心宇宙を相用の方面より釋たる。諸法の差別縁起を説明し、生滅門には體相用を區別して、體に(よつて)依、如來藏に依て故有生滅心、心全體起動して差別の相と成る。海水動起して波浪と成るが如し。この動起の端をアリヤと名づく。藏識と名づく。一切種子を包含する義なり。眞如心が妄識に接觸せられ動を起し、湛たる海に風に浪を起すが如し。ありやと名づく差別の方の總體なり。眞如と生滅との和合に名づく。一法界に達せざるが故に心相應せず、忽然念起を無明と名づく。法性無始の故に無明亦無始なり。眞如に依て無明あり。

無明は眞如と一なりとも異なりとも説べからず。體二なく相一ならず、眞如によつて生じたるも表面には相用異なるが故眞如と異なり。

ありやに覺不覺の二義あり二種義あり。一切の法を攝し一切法を生ず。覺とは自體を覺する智慧、大智慧光明なり。本覺の性が無明に薰すれば無明を破して本覺に還り、全く無明を離脱せるを始覺とす。これ還滅門なり。凡夫二乗菩薩(一)の始覺の深淺ありて、如來のみ究竟覺に達す。

不覺の義、如實に眞法界に知らざるが故に不覺に心起、其念自相なく本覺に迷て覺性を離る。則ち不覺と名づく。此無明が眞如に薰じて、業識を生じ、事識を起し、分別の心執着の念生ず。之を枝末無明と名づく。こゝに於て染淨法界現はる。是流轉門なり。この眞如が轉じて染界と成る本末粗細の順序三細六麁とす。即ち、

一、不覺に動したるを業相と名く。動すれば苦あり。(一)に離れざるが故に起て主と客と作用起る能見相。三、能見あれば所見の境界相現はる。境界に對するが故に六種相生ず。

一、智相、境界に愛不愛を分別するが故に。二、相續相、智によつて段々愛と苦を覺り執意するが故に。三、執取相、

三七

ありや即ち現在の精神に覺不覺二義ありて覺によつて淨法界顯現し不覺に染法界生起す。此染淨一面より見れば差別なく一眞如なり。佗の一方面には染淨劃然として差別す。宇宙の諸相一心の上の事象、總て宇宙理體の起動一心の活用の外ならず。

涅槃及佛身論

三八

眞如縁起論に始覺の智極りて本覺と一致し處四相の生相九相の業相を覺知し根本無明滅盡し眞如本體全現したる處を涅槃とす。

本覺とは本來體に具する覺性絶對平等大智慧光明なり。之を相待差別の上より言ふ時は、智淨相と不思議業との二相ありとす。譬へば十五夜の明月に雲翳消散して清淨玲瓏なる相を下界に向て闇を照すの相とあるが如し。

顯るべき眞如の體相用を説て、眞如自性清淨大智慧光明等。

眞如の體は絶對不遍にして大智慧光明無限の性功德の相を具す。故に無明煩惱を盡して此眞如を全顯する時は、分別を須ひずして自然に種々不可思議の業用を現して、十方三世に遍滿通貫して衆生を利益す。

眞如の體に無量差別功德ありと説けるは、眞如其物に衆生の相待的心念をもて認識すべき差別相ありと云にあらす。唯衆生に示現するのみ衆生の心識に應じて佛陀の報應二身を現す。此用に二種あり。一に分別事識、凡大二乗心所見を應身と爲 轉識に現す。二には業識に依て現す、報身とす。業識とは業相にして主客未分の位なり。衆生の智力が業識の義に順して絶對的に發現するものゝ前に在て眞如の性功德は絶對的無分別に示現す。之を報身とす。

涅槃とは無明煩惱を滅盡して眞如の眞際に復したる處、佛陀所證の境界なり。佛陀は眞如の體相用をもて法報應の三身となす。實體法報二身十方三世に貫し恒存不滅無量功德神力を具す。

三九

心生滅 — 差別門 — 主體

四〇

心生滅とは、如來藏に依るが故に生滅の心あり。所謂、不生不滅、生滅と和合して一に非ず、異に非ず、名て阿梨耶と名づく。此識に二種の義あり。能く一切の法を攝し、一切の法を生ず。云何か二と爲す。一者覺の義。二者不覺の義。言ふ所の覺の義とは、謂く心體念を離る、離念の相は等く虚空界遍せざる所なく、法界一相、即是如來の平等法身に依て、説て本覺と名づく。

覺とは宗教客體の彌陀を念じて、客體の外に主我の念あることなければ、機能致一的に、等虚空界、即、無限光と一相、是（一）機能致一的なるれば、妄我を離脱して眞我と致一すれば、始本不二の（境）となる。始覺とは宗教主體が會て客體と致一せざる時は、未だ意識せざるが故に、始て意識する故に始覺と名づく。

又心源を覺るを以ての故に究竟覺と名く。心源を覺せざるが故に究竟覺に非ず。

覺の階級

始め凡夫の前念の起惡を覺知して故に能く後念を止めて再び起さざらしむる如きも覺醒したりと云もそは或一分の覺にして實は未だ不覺なり。

二、二乗の觀智、初發心菩薩の如きは念の異相を覺して鹿分別執着の念は捨てたれども相似覺と云ふ。

三、法身菩薩等が念住を覺して念に住相なし分別念の相を離れたるは隨分覺と名づく。

四、菩薩地盡き方便満足して一念相應し心の初起を覺して心に初相なし微細の念を遠離するを以ての故に心性を見ることを得。心即ち常住なるを究竟覺と名づく。

宗教主體 — 聖 — 主客關係

四二

智淨相、智とは客體と致一せるが故に淨くなりし心のすがた。謂く光明の實在を實現し、如實に修して、自己を離脱して、自己の天然意象を轉じて、唯彌陀の法身が顯現する時は、我なく、唯彌陀の光のみなる故に智淨なり。

起信に、智淨相とは、謂く、法力薰習に依て、如實修行し、方便を満足するが故に和合識の相を破り、相續心の相を滅し、法身を顯現し、智淨なるが故に。此義云何一切の心識の相は皆是無明なり。無明の相は覺性を離れず。壞すべきに非ず。壞すべからざるに非ず。大海の水は風に依て波動し水相と風相とは相離れざる。而して水は動性に非ず。若風止滅すれば、動相則滅すれ共、濕性壞せざるが故に。

是の如く、衆生の自性清淨心無明の風に因て動ず。心と無明と俱に形相なく相捨離せず。而して心は動性に非ず。若無明滅すれば相續即ち滅し、智相は壞せざるが故に（主體。聖。用。主客同一にして、主即客にして）

不思議業相とは智淨相によるを以て、能く一切の勝妙境界を作す。謂ゆる無量功德の相常に斷絶なく、衆生の根に隨て自然に相應し、種々に現じて利益を得せしむるが故に。

主體も客體に關係的に致一し、解脫靈化せられて、畢竟同化の上には、即ち客體と同體なるが故に、業用亦無二なり。

成所作智 — 起信論 — 不思議業相

不思議業相とは智淨相に依るが故に能く一切勝妙境界を作すこと所謂無量功德の相常斷絶なく、衆生の根に隨て自然に相應し種々に現じて利益を得せしむるが故に、實性論に 如來の身は虚空の無相なる如し、諸の勝智の者の爲に六根の境界を作り微妙の色を現す。妙音聲を出し、佛の戒香を嗅がしむ。佛の妙法味を與え、三昧の

觸を覺せしむ。深妙法を知らしむるが故に妙境界と名づく。

報化二身は真如の大用、無始無終にして相續して絶せず。故に金光明に、應身と云は無始より生死相續して用亦盡きず。故に常住と説く。

無始とは如來一念遍く三世に應じ、所應無始なり。故に能應則無始。猶一念圓智遍く無邊三世の境に達するに、境無邊なるが故に智亦無邊なる如し。無邊の智即ち所現の相なるが故に、無始亦無終なるをう。心識思量の測る所に非ず。故に不思議業相と名づく。

本覺の用は衆生心と本來無二、但不覺隨流の用即ち現せず。妄心厭求すれば用即ち彼心中に於て根に稱つて顯現す。而も作意せずして我差別を現す。故に隨根自然相應なり。作意せずと雖も現じて益せずと云ことなし。

性淨本覺の體相

本覺の體相とは自性天眞の面目一切衆生の根底絶對心靈態の相である。體相とは四種の大義あり、虚空と等しく猶し淨鏡の如し。

宇宙精神の體相が一大觀念に大圓鏡の如くの状態である。この相に四種の大義あり。一、如實空鏡、一大觀念態すべての現象を離れたる本質のまゝ。二、如實不空鏡、森羅萬象は一大觀念の所現である。三、法出離鏡、一大觀念鏡は無明のくもりなく、大智慧光明の相なり。四受用鏡(緣薰習鏡)宇宙一大觀念の鏡は遍く法界を照しあれば衆生の向ふ處に其に應現の相を示す。

一は大智明鏡の體、二は萬影顯現す、三、鏡の明相内外に映徹す。四に衆生是に向ふ時念に隨て應身の相を示現す。

不覺—根本不覺—始末不覺

不覺とは如實に真如の一なりと知らざるが故に、不覺の心起て其念(分別)あり。念

に自相なし。本覺を離れず。猶迷へる人が方に依るが故に迷ふ。若し方を離れば迷あることなきが如し。衆生も亦然り。覺に依るが故に迷ふ。若し覺性を離れば則ち不覺なし。不覺の妄想の意識あるからこそ、名義を知て爲に眞覺と説く若し不覺の心を離れば則ち眞覺自相の説くべきなし。

主體—不覺

不覺とは、謂く實の如くに真如の法一なりと知ざる故に、不覺の心起て而して其念あり。念に自相なし。本覺を離れず。猶迷入の方に依るが故に迷ふ。若し方を離れて則ち迷有こと無きが如し。衆生も亦爾り。覺に依るが故に迷ふ。若し覺性を離れば則ち不覺なし。不覺の妄想なるもの有が故に夫に對して能く名義を知て爲に眞覺を説く。若し不覺の心を離れば、相待なきが故に、則ち眞覺の自相とし説べくなしと。

此義を釋せば、不覺に依から三種の相を生じて相應して相離れざるなり。其三とは一、無明業相 不覺に依るが故に心動するを業と名づく。若し覺すれば則ち動せず動すれば苦あり。果、因を離れざるが故に。

二、能見相 動に依るが故に能見あり。動せざれば見なし。

三、境界相 能見に依るを以ての故に境界妄に現す。見を離れば則ち境界なし。此が能見に依て種々の境界に現象し來れり。

六塵

境界の緣あるを以ての故に復六種の相を生ず。六とは、

一、智相 依境界心起て愛と不愛とを分別するが故。同一の本體を知らざるが故に。

二、相續相 智に依るが故に、其苦樂の覺を生ず。心が念を起し、相應して斷せざ

るが故に。

外界誘惑、意に適すれば愛し樂しみ、適せざれば恨らみ苦しみ、其關係は感を潤して業を潤し後の生死を引持して相續。

三、執取相 相續に依て、境界を緣念し、苦樂を住持して、心著を起すが故に。

苦樂を神識に印燒して執着して捨ること能はず。

四、計名字相 妄執によりて假の名言の相を分別するが故に。

名字は假ものなれども、自己の名は全く自己なりと認めて、譽れば喜び毀ればいかる等。

五、起業相 名字に依て名を尋ね、取著して種々の業を造るが故に。

假の相に執着し假の名譽をのこすなどと惑うて身三業を造る。

六、業繫苦相 業に依て報を受けて自在ならず。

當に知るべし。無明能く一切の染法を生ず。一切の染法皆是不覺の相なるを以ての故に。

此不覺と覺と本體は同一にして異相なし。同相とは種々の瓦器は皆同じく微塵の性相なるが如く、無漏と無明との種々の業幻皆同じく真如の性相なり。

異相とは同じ微塵の土より成れる種々の瓦器巧異不同なる如し。迷悟隨(染)差別せり。

生理衝動と業識

神の一切能が展して世界元氣と曰ひ衆生の生理衝氣となる。云はば生理衝氣と業識とはいかなる關係をなすべき哉。

答へて、業識とは三展したる自我にして此業識が形氣につきて生活するを氣を生理衝動と云ひ、生理我全部を業と云ふ。衝氣は全部にあらず、業識は知と意とを統一す

る全心なり。業識は佛性未だ顯開せざる自我なり。此自我は種々因縁によりて其性を變更す、故に異熟識と名づく。

忽然念起無明

無明薰習に依りて起る所の識凡夫二乘の能く知る處にあらず。唯佛のみ窮了すと。何を以ての故に、是心本より自性清淨、而も無明ありて其れに染められて染心あり、染心あるなれども常恒不變なり。此義は唯佛能く知り玉ふ。謂ゆる心性は常に無念、故に不變と名づく。然るを一法界に達せざる故に心相應せず、忽然として念起、名けて無明と爲す。第三展衆生性の生理我と屬したる、(

主我妄執

本來の一中に眞理に稱ふ屬性は本自具備して缺くる處ないのであるが、其本來無邊の性徳有するものを自分とは別の自己を立てて本の性徳を自分よりへだて、しもふと機制の束縛の爲に、本性とは正反對となりて本自を外とし眞ならざるを眞とし迷の相となりたり。

無明薰習

無明薰習故起識、其理凡夫の知る所に非ず。若法身を證すれば則ち知る。何故ぞ是れ本より自性清淨なるに(實體定相)、無明の爲に染られて染心と顯れたり。染心(有れども)常恒不變である。心性()常に念なきが故に不變と名づく。

一法界に達するが故に心相應せず。忽然として念の起るを無明となづく。染心とは六種あり。

- 一 執相應染
 - 二 不斷相應
 - 三 分別智相應
- 相應

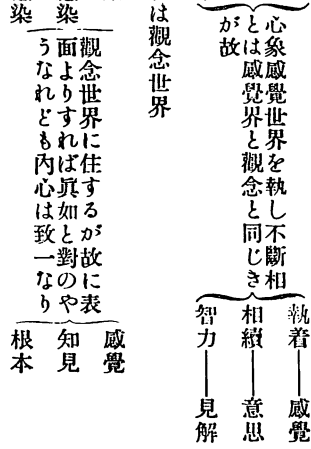
- 四 現色不相應
 - 五 能見心不相應
 - 六 根本業不相應
- 不相應

○ 唐相因學休曰、大衆徒無始來常認爲身者是地水火風假合之身旋衆旋散屬無常法非我身也。大衆徒無始來常認爲我。我心是緣慮客塵虛妄之心不起作隨屬無常法非我心也。我有真心圓滿寂寂者也。我有真心廣大靈知者也。空寂靈知神用自在性含萬德總超三百非一如淨月輪圓滿無缺。

○ 自性清淨 爲無明所染、染中自中存在は佛のみ知、心性には心象なし、故不變、一法界に達せぬ故心性と相應せず、忽然として念動て現れ來たが無明と名く、心性凡ての心象染に六種。

○ 庵は感覺世界

- 一、執相應染
 - 二、不斷相應染
 - 三、分別智相應染
- 細は觀念世界

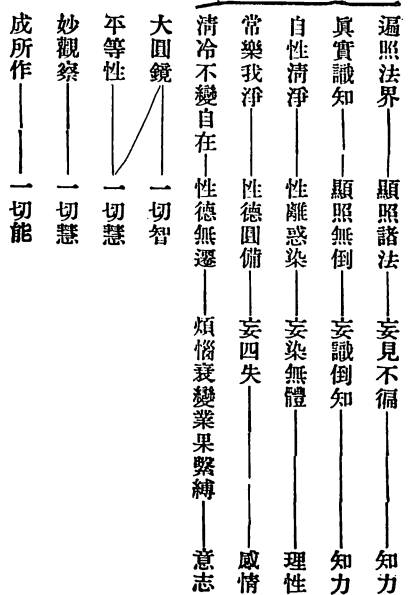


- 四、現色不相應染
 - 五、能見心不相應染
 - 六、根本業不相應染
- 觀念世界に住するが故に表
面よりすれば眞如と對のや
うなれども内心は致一なり
- 感覺
知見
根本
- 染心とは煩惱碍。能く眞如根本智を碍くが故に。

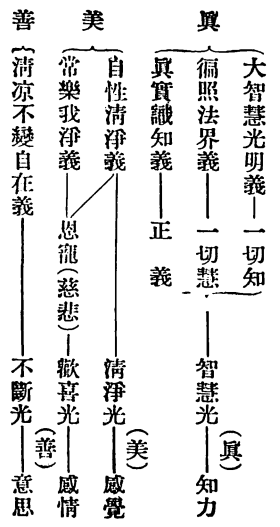
衆生の精神の根底眞如の自體に具備の聖徳

業識生滅 人格機制生理規定

大智慧光明——本覺智明——不覺無明——知力



無邊光の定相



昭和二年二月廿五日印刷
同 廿八日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢 (郵稅共)
年拾貳冊 貳圓 郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成
發行人 小林 七太郎

東京市小石川區荻野町九八
印刷人 小林 七太郎

發行所 東京市小石川區水道橋二ノ四四
ミオヤのひかり社
電話東京六八五一番